

No	セッション 番号	タイトル	研究分野	代表者	連絡先((at)を@にして下さい)	共同コンピーナ	趣旨
1		海洋生態系の統合的理解: 生物多様性から物質循環まで	生物	浜崎恒二 (東大大気海洋研)	hamasaki(at)aori.u-tokyo.ac.jp	梅澤有(長大院水産環境) 近藤能子(長大院水産環境) 高木悠花(東大大気海洋研)	海洋生物は、分類、サイズ、生態など多様性に富む生物群から構成されており、これら生物群の多様性が環境変動に対する海洋生態系の安定性や復元性に大きな役割を果たしている。しかしながら、海洋生物の多様性や機能から物質循環に至る生態系全体を統合的に理解することは容易ではない。本セッションでは、バクテリアから魚まで様々な栄養段階の海洋生物を対象とし、生物多様性や群集動態、食物網構造、これらを取りまく栄養塩や微量金属等の生元素動態、エネルギー収支、物質フラックス、更にはこれらの情報を集約した生態系モデリングなど、海洋生態系に関する新しい研究成果を概観することにより、その統合的な理解に資することを企図する。また、海洋における生物系領域研究の情報交換とネットワーク形成の機会を提供する。
2		黒潮の海洋環境と生物生産	複合領域	齊藤宏明 (東大大気海洋研)	hsaito(at)aori.u-tokyo.ac.jp	中村啓彦(鹿大水産) 小針統(鹿大水産) 吉江直樹(愛媛大CIMES) 渡慶次力(宮崎水試)	黒潮は莫大なエネルギーや物質を輸送する流れであり、我が国の気候、海洋環境、生態系に大きな影響を与えている。これまでその物理過程や生態系構造に関し、多くの研究が行われてきたが、貧栄養の黒潮流域においてなぜ多くの魚類生産を生じるのかの理由は不明である(黒潮パラドックス)。近年、黒潮流域では渦形成、移流、乱流混合など、栄養塩環境を向上させる現象が見つかってきているものの、それに伴う生物生産や物質循環に関する情報は多くはない。本セッションでは、黒潮源流域から黒潮続流域とその隣接海域を対象として、海洋構造や混合機構、栄養塩環境、食物網構造と動態、生態系モデリングなど、黒潮の物理・化学・生物に関する新しい研究成果を俯瞰できる場を提供したい。また、これらの講演や質疑応答を通して黒潮とその生態系に対する理解を深め、研究分野を横断した学際的・学融的研究を醸成する場としたい。
3		南北両極域・寒冷域の環境変動に関する分野横断研究	境界・複合領域	野村大樹 (北大水産)	daiki.nomura(at)fish.hokudai.ac.jp	平野大輔(極地研) 高尾信太郎(北大環境科学) 漢那直也(北大低温研) 小野純(JAMSTEC)	近年、南北両極域や周辺寒冷域(オホーツク海等)における諸現象の理解が地球環境変動を理解する上で重要であるという共通認識がなされつつある。我が国では、GRENE(北極気候変動研究事業)、ArCS(北極域研究推進プロジェクト)、JARE(南極地域観測事業)、SIRAS(オホーツク海水観測活動)等の大型・長期研究プロジェクトやIAI(国際南極大学カリキュラム)等の教育プログラムが遂行され、極域・寒冷域研究への注目度がかつてない高まりを見せている。本セッションでは上記のような研究プロジェクト・教育プログラムに限らず、国内外での多種多様な研究実施体制の下で得られた最新の知見について情報共有するとともに、分野(物理・化学・生物)、手法(観測・データ解析・モデル)、領域(大気・海水・海洋・雪氷)を横断した学際的な観点から、北極・南極・オホーツク海などの極域・寒冷域における環境変動研究の将来展望を議論することを目的とする。
4		数ヶ月から数10年先の気候変動予測と海洋・海水の役割	物理	土井威志 (JAMSTEC)	takeshi.doi(at)jamstec.go.jp	藤井陽介(気象研) 中野渡拓也(極地研)	2016年春季大会のセッションでは、数ヶ月先の気候変動予測と海洋の重要性に関して最先端の知見を交換できた。秋季大会では、そのセッションの趣旨を踏襲しつつ、数ヶ月から数10年先の気候変動予測までを対象に、海洋だけでなく、海水の重要性までを含めたセッションを提案する。海洋・海水が予測の潜在的根拠となる気候現象を中心に、予測の基盤となる理論的な側面(観測やモデルによるプロセス研究を含む)と技術的な側面(モデル、データ同化システム、アンサンブル予測手法の開発等)からの発表を歓迎する。

5		縁辺海周辺で起こる混合と西部北太平洋の物理・化学・生物過程	境界・複合領域	西岡純(北大低温研)	nishioka(at)lowtem.hokudai.ac.jp	吉川裕(京大理) 原田尚美(JAMSTEC) 郭新宇(愛媛大CIMES)	西部北太平洋とその縁辺海周辺では、島嶼など海底地形が複雑なため、潮汐などによって鉛直混合が強化されている可能性が指摘されている。この親潮や黒潮の上流域で起こり得る強い鉛直混合によって、中深層から栄養物質が表中層へ輸送され、海流によって日本近海に運ばれ、さらに渦や前線に伴う様々な混合過程によって表層に供給され、生態系の維持や漁場形成に寄与している可能性が高い。本セッションでは、観測・理論・モデル研究の成果を一同に集め、縁辺海周辺海域で起こっている混合の諸現象が、西部北太平洋の物理・化学・生物過程とどのようにリンクしているのかを理解することを目指す。比較を含めた他海域に関する講演についても歓迎する。
6		中緯度大気海洋相互作用	境界・複合領域	佐々木克徳(北大理)	sasakiyo(at)mail.sci.hokudai.ac.jp	杉本周作(東北大フロンティア研) 西井和晃(三重大生物資源) 東塚知己(東大理) 大石俊(東大理)	中緯度海洋域は、亜熱帯循環に伴う暖流と亜寒帯循環に伴う寒流により強い水温勾配をもつ前線帯が形成される領域であり、かつ大気への熱放出が活発な領域である。近年、衛星観測や現場観測、高分解能数値モデルにより、中緯度域の海洋が熱放出や水蒸気供給を通じて、様々な大気現象に影響することが明らかになりつつある。そこで本セッションでは、中緯度域の海洋・大気現象に注目し、メソスケール現象から海盆規模の現象、数日規模変動や季節変動から温暖化などの長期変動にいたるまでの幅広い時間・空間スケールの研究成果を発表していただくことで、大気海洋相互作用系の理解を深めたい。また、大気海洋相互作用研究の今後の発展や展開を見据えるために、雲やエアロゾル、生態系の観点からの発表を歓迎する。
7		熱帯域の大気海洋変動	境界・複合領域	名倉元樹(海洋研究開発機構)	nagura(at)jamstec.go.jp	東塚知己(東京大学大学院理学研究科) 長谷川拓也(海洋研究開発機構) 時長宏樹(京都大学防災研究所) 安藤健太郎(海洋研究開発機構)	熱帯域には様々な時空間スケールの現象が存在し、大気のテレコネクションを介して全球的な気候に影響を及ぼしている。マデンジュリアン振動やそれに付随する季節内変動、エルニーニョ・南方振動やインド洋ダイポールなどに代表される年々変動スケールの気候変動モード、熱帯太平洋の数十年スケール変動やその地球温暖化停滞との関連、といった現象がその例である。本セッションではこれら熱帯域の現象、およびそれに関連する素過程(大気海洋相互作用、混合層過程、循環の力学、波動伝播、生物化学過程等)やメカニズムの研究に関して議論を行う場とする。理論研究・観測データ解析・数値モデリング・データ同化など幅広い研究手法からの発表を歓迎する。
8		沿岸の海洋物理学 ー理論・観測・モデリング	物理	磯辺篤彦(九大応力研)	aisobe(at)riam.kyushu-u.ac.jp	郭新宇(愛媛大CIMES) 田中潔(東大大気海洋研)	沿岸海洋の海洋物理学一般を取り扱うセッションを提案する。対象海域は問わない。浅海域固有の力学過程について普遍的観点からの議論が深まることを期待したい。沿岸海洋に有効な新たな観測手法およびモデリングや同化プロダクトの運用に関する提案、河川ブリュームや水塊形成、内部波、沿岸海洋前線、外洋海況の波及や大気海洋相互作用など、沿岸海洋の力学過程に関する研究成果を歓迎する。学際的研究や縁辺海研究は、隣接するセッション「縁辺海・沿岸域における力学・生物過程・物質循環」を推奨する。両セッションを併せて当該分野の研究を俯瞰したい。

9		緑辺海・沿岸域における力学・生物過程・物質循環	境界・複合領域	木田新一郎 (九大応力研)	kida(at)riam.kyushu-u.ac.jp	福田秀樹(東大大気海洋研) 吉江直樹(愛媛大CIMES)	内湾・沿岸域とともに西太平洋に連なる緑辺海は日本及び東アジア諸国の海洋気候場と水産資源の形成に重要な役割を担っている。近年、直接・衛星観測や高解像度数値モデルの発展により、循環場から生態系までその理解が急速に進んでいる一方、これらの研究はまだまだ個々の海域や分野の枠組みで議論されることが多い。本セッションでは、これまで行われてきている長期モニタリングの報告や最新の観測や研究の成果や手法を共有し、互いの研究発展につなげることを目的とする。生物過程・物質循環から水塊・循環場まで緑辺海・沿岸域で起きている様々な時空間スケールの現象の発表を広く募集する。
10		海洋食物網の再構築	生物	高橋一生 (東大院・農学生命)	akazutak(at)mail.ecc.u-tokyo.ac.jp	一宮睦雄(熊大環境共生)	海洋生態系食物網構造の理解は、生物生産構造だけでなく、物質循環過程の解明に不可欠である。しかし、海洋生物の多くは直接観察が困難であり、陸上生態系と比較して、海洋の食物網に関する理解は大きく遅れている。近年、バイオリギング、高速度カメラ、VPR等の新たな観察手法の開発、安定同位体にて代表されるトレーサー分析技術の進歩により、これまで知り得なかった様々な捕食-被食関係が明らかにになりつつある。これらの新知見は、従来の胃内容物観察や摂餌実験等による基礎データの重要性を再認識させると共に、より解像度の高いデータの必要性を浮き彫りにした。そこで本セッションでは、プランクトン、ベントス、ネクトンを含めた幅広い海洋生物の食物網に関する講演を募集することによって、海洋生態系食物網に関する理解を深め、新たな研究の方向性を探る。
11		有明海・八代海的环境変動－COMPAS等－	境界・複合領域	速水祐一 (佐賀大低地センター)	hayami(at)cc.saga-u.ac.jp	和田実(長大水産環境) 松永信博(九大総理工)	近年の有明海では、貧酸素水塊や赤潮の発生、二枚貝の減少など、多くの環境問題が発生している。八代海においても、有害赤潮の発生による漁業被害などの問題が発生している。両海域は地理的につながっているだけではなく、大きな潮汐、広い干潟、独特の生物相などの共通点がある。また、有明海・八代海特措法によって、環境保全・改善並びに漁業振興のための調査の実施、知識の普及をすべきことが定められている。本セッションでは、有明海地域共同観測(COMPAS)などによって明らかになってきた、本海域の環境変動、生態系特性に関する近年の研究成果を共有し、学際的な観点から議論する。プロジェクト以外からの多様な発表も歓迎する。
12		実用的な海洋の予測手法とその利用	境界・複合領域(主に物理)	稲津大祐 (東大海洋アライアンス)	inazud(at)oa.u-tokyo.ac.jp	中田聡史(神大海事) 加古真一郎(鹿大院理工) 青木一弘(中央水研) 日原勉(JAMSTEC)	海洋の物理シミュレーションの高精度化により、それを基盤とする予測システムが実用的となってきた。予測の対象は、波浪、津波、潮汐、高潮・急潮、および、黒潮に代表される海流変動なども多岐にわたる。これらの実用的な予測結果が、沿岸海洋環境の保全・利用、漁業・海事の計画、防災、漂流物・汚染物質拡散予測など多面的な観点から求められている。2016年春季大会に引き続き、このセッションでは、各種予測システムの開発とその高度化の推進を含めた実運用・利用を展望する議論を行う。まず、予測シミュレーションモデルの開発・実装、採用する逆問題・データ同化手法、および、効果的な予測のための計測・モニタリングのデザイン(OSSE)など、予測の高度化にとって重要となるプロセスの観点からの発表を期待する。加えて、予測情報の社会利用(ユーザー側)の立場からの問題発見・提起も歓迎する。これまで対象とする現象ごとに議論されがちだった予測システムの開発・運用を、様々な研究者・ユーザー同士で議論する場となることを期待する。

13	海洋再解析の利活用	境界・複合領域	豊田隆寛 (気象研)	ttoyoda(at)mri-jma.go.jp	望月崇 (JAMSTEC) 高山勝巳 (九大応力研) 田中裕介 (JAMSTEC)	大気再解析データは、観測・カスを反映した統合データセットとして、広く気象現象のプロセス研究や予測研究に用いられてきた。近年、これを海面強制力とする海洋モデリング技術の発展、及び、データ同化手法の向上により、全球から (ネスティング手法を利用した) 例えば北西太平洋といったスケールの海洋再解析データセットが発表されていて、物理環境に加えて生物・化学変数が収録されるものもある。これら海洋再解析の利活用が科学的な進展に繋がることが期待されるが、この利活用の取り組みは主に個別に行われている。データ利用者とデータ提供者が集まってこれらを横断的に議論することは、新しい利用に向けたアイデアに繋がり、また、利用の実態に即したシステム開発のための有用な情報となる。
14	海洋プラスチック問題	境界・複合領域	岩崎慎介 (九大応力研)	iwasaki(at)riam.kyushu-u.ac.jp	加古真一郎 (鹿大院理工) 片岡智哉 (国総研)	人為的な海ごみの七割を占めるプラスチックは、我々が目視できるものから数 μm と様々なサイズで海洋中を漂っている。このプラスチックには、海洋中の残留生有機汚染物質を吸着させる性質があるため、誤食を通して汚染物質を生態系に移行させる媒体となることが危惧されている。このことから、海洋プラスチック問題に対する社会的関心は、近年急速に高まっている。本セッションでは、海洋プラスチックの輸送過程や、それによる汚染物質の輸送、生態系への影響といった様々な分野 (物理・化学・生物) からの最新の研究成果を情報共有することで、この問題に関する研究の現状把握や今後の発展を目的とする。また、海洋プラスチックだけでなく、漂流漂着ゴミに関する最新の研究成果も歓迎する。
15	沿岸の光環境と一次生産	境界・複合領域	作野裕司 (廣大)	sakuno(at)hiroshima-u.ac.jp	山口一岩 (香川大農) 石坂丞二 (名大宇宙地球環境研)	沿岸域での光環境は、そこでの一次生産者の動態や一次生産量をコントロールしている。水中では植物プランクトンが光を決める主要な要因となっているが、無機懸濁物質や有色溶存有機物が重要な海域もある。これらの物質に影響され、透明度や海底にどれだけ光が到達するかも決められている。一方で、光環境から一次生産者や生産量を推定することも衛星リモートセンシングを中心に行われている。特に、250mの空間解像度の日本の海色ミッションである気候変動観測衛星 (GCOM-C) の打ち上げが間近 (2016年度中予定) に迫っており、これを利用した沿岸域での海洋の光環境および一次生産の研究や応用も期待される。そこで本セッションでは、海洋の中でも特に複雑である沿岸の光環境と一次生産の関係について、現場および衛星での研究について議論することを目的とする。
16	海洋酸性化と温暖化の生態系への影響評価	境界・複合領域	小笠恒夫 (国際水研)	tono(at)fra.affrc.go.jp	藤井賢彦 (北大地球環境) 芳村毅 (電中研)	大気CO ₂ 濃度の増加は直接的に海洋酸性化を、間接的に海水温の上昇 (温暖化) を引き起こしている。IPCC AR5では海洋生物への海洋酸性化の影響を総合的に理解する上では知見がまだまだ十分ではないことが示され、温暖化の生物影響も含めた知見の充実が求められている。国内の各機関では、温暖化の生物影響について沿岸域を中心に実験的研究が進みつつある。一方、海洋酸性化の現状や将来変化を把握する観測・モデル研究や生物影響を把握する飼育・培養実験研究も進められている。そこで、沿岸域・外洋域を対象とした、温暖化の生物影響、海洋酸性化の進行や生物影響、あるいは温暖化・酸性化の複合的な生物影響に関する最新の知見を発信する場とする。

17		サブメソ・メソスケール変動	境界・複合領域	升本順夫 (東大理)	masumoto(at)eps.s.u-tokyo.ac.jp	佐々木英治 (JAMSTEC) 内山雄介 (神大工) 伊藤大樹 (東北大理) 山上遥航 (東大理)	海洋中規模渦に代表される数百キロメートル規模のメソスケール現象に関する研究は、現象そのもののメカニズム、大規模場へ与える影響や相互作用、海洋生態系への影響などを中心に大きく発展してきました。近年では、メソスケール現象よりも1〜2オーダー小さなサブメソ(数キロ〜数十キロ)スケール現象も注目されるようになり、試行的な研究が多数行われ、今後の展開が期待されます。これらのサブメソ・メソスケール現象は、沿岸域から大循環まで、数日から数年の時間規模で、多くの海洋現象に対して重要な役割を果たしていると考えられています。本セッションは、沿岸・外洋、前線帯など様々な海域でのサブメソ・メソスケール現象について、物理的・生物/生態系的な視点から現象をより深く理解することを目的とし、観測、数値モデリング、理論的考察など、多様なアプローチの研究発表を広く募集します。
18		海洋力学全般	物理	田中祐希 (東大理)	yuki.tanaka(at)eps.s.u-tokyo.ac.jp	相本秀則 (名大宇宙地球環境研) 久木幸治 (琉大理) 三寺史夫 (北大低温研)	本セッションでは、海洋中に見られる具体的な現象の中から一般原理を抽出し体系化する事によって数理モデルを構築し、それを現象の解釈・予測・パラメータ化につなげるという海洋力学の意義を再確認する。この円環的な思考を通じて、風波・波浪・内部重力波・ロスビー波・赤道波・潮汐流・渦・蛇行・大循環・境界層・大気海洋系など幅広い現象についての研究発展の見通しが与えられるとともに、共鳴・非線形相互作用・スペクトル解析・確率統計・力学系など種々の理論の利用方法が開拓される事を期待する。「全般」の意図として、観測データ・再解析プロダクトの診断手法の開発および、生態系モデルや環境・気候問題を含む学際的な研究発表も歓迎し、新しい発想を生み出す原動力としたい。
19		太平洋深層循環の全容解明に向けて	境界・複合領域	川崎高雄 (東大大気海洋研)	kawasaki(at)aori.u-tokyo.ac.jp	縦縞慎也 (JAMSTEC) 田副博文 (弘前大)	太平洋上部深層には海洋生物活動に重要な溶存物を多く含む水塊が存在している。従って、熱・淡水だけでなく物質分布・循環の観点からも太平洋深層循環の全容を明らかにすることは重要である。現状では、太平洋下部深層での南極底層水の流入・上昇の定量的評価が十分とは言えず、更に上部深層では深層水の行方すら十分解明されていない。太平洋深層では近年の高精度 revisit 観測によって水温上昇など大規模長期変化が検出され、変化に富んだ深海であることが明らかになってきた。こうした変化・変動の成因を考える上でも、鉛直乱流混合や海底熱源など重要な物理現象、物質分布を統合的に扱う議論が必要である。乱流混合については、昨年度より新学術領域研究「海洋混合学(OMIX)」が開始され、太平洋深層循環の統合的な理解の深化が期待される。本セッションは、観測・モデル・データ同化など手法を問わず、海洋物理学・化学・生物学など多様な観点からの研究発表を募り、太平洋深層循環とそれを取り巻く諸現象への理解を深める場となることを期待する。
20		海洋学におけるオープンサイエンスとデータ公開	境界・複合領域	照井健志 (極地研)	terui.takeshi(at)nipr.ac.jp		第5期科学技術基本計画において、オープンサイエンスの推進が新たに盛り込まれるようになった。研究データのオープン化を推進し、新たな知見の創出が求められている。オープンサイエンスは世界的な潮流として注目されている。2016年度春季大会において、データ公開の取り組みに関するセッションを設け、各機関の取り組みの情報共有と議論を始めたところである。本セッションは、春季大会に引き続き、研究者個人から機関で行われている、データ公開に関する取り組みや、オープンソースやWebサービスの開発など、オープンサイエンスに関わる情報を共有し、議論を行う。

21	海洋塩分	境界・複合領域	高玉 孝平 (ハワイ大学 国際太平洋研究センター)	takatama(at)hawaii.edu	阿部泰人(東京大学 大気海洋研究所) 細田滋毅(海洋研究開発機構 地球環境変動研究開発センター) 古恵亮(海洋研究開発機構アプリケーションラボ) 野中正見(海洋研究開発機構アプリケーションラボ)	海洋塩分は水温とともに海洋の循環に大きく影響するが、これまでは観測データの不足によりその時空間的な分布と変動を議論することには大きな困難がともなっていた。近年になりArgo計画による全球の立体的な塩分の分布が10年以上にわたり蓄積され、さらに人工衛星によって高解像度の海面塩分データが得られている。また高解像度化する海洋モデルはメソスケールの過程と塩分の関係についての議論を可能にしている。本セッションでは全球の海域を対象として、観測及びモデルを問わず、塩分の分布と変動、塩分と海洋循環との相互作用、そして塩分の変動と密接にかかわる海洋および相互作用を通じた大気現象についての講演を募る。
22	海面熱・運動量・淡水フラックスと海洋変動	物理	富田裕之 (名古屋大学 宇宙地球環境研)	tomita(at)hyaro.nagoya-u.ac.jp	嶺巖慎也(JAMSTEC) 辻野博之(気象研) 市川香(九大応力研)	近年の人工衛星による全球地球観測技術の発達およびArgoフロートの展開に代表されるような海洋表層の現場観測網の拡充に伴い、海洋のほぼ全域で海面熱・運動量・淡水フラックス変動と海洋表層変動を同時に把握した観測に基づく議論が可能となりつつある。本セッションは、衛星観測に基づく海面熱・運動量・淡水フラックス推定に関する研究と、海面フラックスによって生じる海洋変動について、現場・衛星観測や数値モデルなど多様な手法に基づく研究の発表を募るとともに、それらの研究進展を支える技術やデータマネージメントに関わる研究者が同じセッションで話題を共有することで当該分野における将来の研究発展に資することを目的とする。
23	黒潮主流周辺海域における現場観測	境界・複合領域	岡英太郎 (東大大気海洋研)	eoka(at)aori.u-tokyo.ac.jp	根田昌典(京大院理) 植原量行(東海大海洋) 川合義美(JAMSTEC) 豊田邦夫(東海大海洋)	黒潮主流周辺海域では活発な大気海洋相互作用が生じ、近年は海洋から大気循環に与える影響が数多く報告されている。また、海洋表層ではサブダクションが起こり、物質循環や生物化学過程に大きな影響を及ぼしている。中緯度相互作用に関する研究は数値モデルや衛星観測により飛躍的に進みつつあるが、特に海洋側の同化による再解析は発展途上であり、モデルによるメソ・サブメソスケール現象の検証も十分とは言えない。生物化学的要素は観測データ自体不足しており、現場観測データを注視して数値モデル研究に反映させる活動も疎かにできない。このような状況を踏まえ、この海域に特徴的な短い時空間スケールの大気海洋擾乱が諸プロセスに与える影響を現場観測から明らかにするために、2013～16年に3つの白鳳丸航海(KH-13-3、KH-14-1、KH-16-3)が新学術領域研究「気候系のHotSpot」などの支援の下、実施された。本セッションではこれらの航海で得られた観測データ解析の結果を持ち寄り、それぞれの関連性を意識しながら多角的に議論し、今後の中高緯度相互作用研究のために必要な現場観測のプランを検討する機会を設ける。他航海の解析結果や化学・生物学的な視点からの解析結果、数値モデルとの比較検証結果なども歓迎する。
24	海洋混合の実態に迫る力学的研究の最前線	物理	伊地知敬 (東大院理)	ijichi(at)eps.s.u-tokyo.ac.jp	永井平(東大院理) 日比谷紀之(東大院理)	海洋中の乱流混合は、熱や溶存物質の輸送を通じて沿岸域や外洋域での様々な物理・生物・化学過程に重要な役割を果たしており、そのメカニズムの解明に基づく海洋混合の正確なパラメータ化が今後の海洋学において不可欠となっている。海洋混合を支配するメカニズムは海域や深度によって様々である。例えば、海洋表層においては、風応力に起因する近慣性内部波シアーや海面冷却が重要となる一方で、中・深層においては、海底で励起された内部潮汐波と背景内部波との非線形相互干渉が重要となる。本セッションでは、様々な海域や深度における海洋混合に関して、理論・観測・数値実験から得られた最新の力学的研究成果を募集する。本セッションでの議論を通じて、沿岸域から外洋域まで、さらに、海洋表層から深海底近傍までの、海洋混合のメカニズムに関する現時点での知見を共有し、その実態に迫りたい。

25		九州周辺の沿岸域における海洋災害に関する研究	物理	日比谷紀之 (東大院理)	hibiya(at)eps.s.u-tokyo.ac.jp	柿沼太郎(鹿大院理工) 松野健(九大応力研)	九州周辺の沿岸域は、強い潮流とともに複雑な海岸線や起伏に富んだ海底地形の存在によって特徴づけられており、古くから「あびき」や「二重潮」に代表されるような海洋災害現象が伝承されてきた。また近年では「急潮」の被害も取り上げられるようになってきている。本セッションでは、九州周辺の沿岸域で発生する沿岸災害に焦点をあて、最近の観測手法の進展により新たに明らかになったその実態の紹介も含めて、その発生機構に関する再考察を行う。さらに、その結果に基づいた防災対策も議論していきたい。理工学的なアプローチのみでなく、広く環境学的なアプローチからの研究発表も期待する。
26		海洋物理(基盤・萌芽)	物理	プログラム 編成委員会	jos2016fall(at)gmail.com		
27		海洋化学(基盤・萌芽)	化学	プログラム 編成委員会	jos2016fall(at)gmail.com		
28		海洋生物(基盤・萌芽)	生物	プログラム 編成委員会	jos2016fall(at)gmail.com		
29		海洋科学総合	境界・複合領域	プログラム 編成委員会	jos2016fall(at)gmail.com		